二十一世紀にむけて幼児教育を考える(15)

自然ばなれの生活と子どもの未来

山内　昭道

ローレンツといえば、「刷りこみ」（インプリンテング）の発見者として、一般的にもよく知られた動物行動学者として知られている。動物の行動を研究するには、その行動を観察することが必要であるが、彼はこの行動観察について次のように述べている。

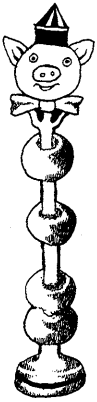
「美を評価することは、生物的自然を研究するための条件のひとつです。なぜなら、もしも動物たちの美しさを楽しいと感じなかったら、彼らの行動の法則を見出すまでの長いあいだ彼らをじっと眺めている根気など湧いてくるはずがないでしょう」（『文明化した人間の八つの大罪』日高他訳、

一九七三）

そして、現代の大生物学者百人へのアンケートから彼らは「十歳より前、五、六歳のころ動物を好きになっているのです。全員が例外なしにです」。

私の身近な昆虫学者のことを思い出す。私が昔勤務していた農業試験場害虫研究室の先輩K氏に、保育者のための野外観察の講師をお願いした時、幼稚園の思い出を話してくれた。K氏が幼稚園児だった時、園庭の土の中から偶然白いウジムシを見つけて、先生のところに持っていって「これ何？」と聞いたところ先生に「わからないわ」といわれた。一週間程たった時、先生が「この間見つけた白いウジムシね。コガネムシになる幼虫らしいわよ」と教えられた。それから園庭の雑草を引き抜いたりして、積極的に白いウジムシを探しはじめ、いつか昆虫に強く興味を持つようになり、昆虫学者になろうと思うようになったという。当時、幼稚園へ入園した子どもたちは経済的に恵まれた家庭の子どもたちであり、大学まで進学できる可能性があったが、不況のため倒産し進学できなくなった。しかし昆虫学を学びたく、東京大学農学部の助手（と言っても現在のような助手ではない）となり昆虫学を学び、後に農業試験場の技官となった。害虫研究のかたわら、カガンボの分類をも研究した篤学のK氏である。彼の昆虫学への出発が幼稚園であったことを、この時はじめて知り驚いたのであった。

野鳥の写真家になったのは、幼稚園での冬の



朝、砂場に落ちていたノゴマという小鳥を拾い、のどもとの紅色の美しさに魅せられたからであったという事例もある。（『原野の四季』周一）

さて、ローレンツは現代文明のあり方は、人間性を破壊していると次のように指摘する。

「私たちの住んでいる外部環境が破壊されているだけではない。人間自身の内部でも、人間をとりまく創造物の美しさや偉大さをおそれる気持が破壊されている。」（同右）

彼は生物学者になるために、幼児期に自然とふれあい、自然の美しさを楽しむ心を育てなくてはならないといっているのではなかろう。人間が幸せな生活をつくるためには、人間をとりまく自然の美しさや偉大さをおそれる気持をすべての人間が失ってはならないと主張しているのだ。

日本でも、戦前生まれの人たちは身近な自然と遊んだ経験があったが、戦後の生活環境は機械による合理的生活が進行し、自然ばなれを加速し、子どもたちが自然と遊ぶ場と時間を奪ってしまっている。バーチャルリアリティ（仮想現実）の豊かさに反比例して、自然と直接ふれあう時間を減少させている。コンピュータを操作して、さまざまな動物たちの映像によって、動物の世界の知識を豊かにする。テーマパークで、アフリカや恐竜の世界を体験するが、これは努力なしに安易に目の前に見ることのできる世界でしかない。星空もプラネタリウムの人工の星空しか見たことがなく、満天の星空を見る機会がない子どもたちが多いのではないだろうか。このままでは子どもたちの心の破壊がおきてしまうのではないだろうか。

生命科学者中村桂子氏は最近『科学技術時代の子どもたち』（岩波書店、一九九七）を書き、

ローレンツの憂慮を、現実の問題として明確に提起した。

「私が、科学技術による自然破壊という時に意識しているのは、日常眼にする山・川・草・木などだけではありません。私たち人間も自然の一員なのですから、私たちの中にも自然があります。また私たちと他の自然、つまり山や川や他の生き物たちとの間に作り上げて来た生活も広い意味での自然と言ってよいと思います。人間が〝長い時間をかけて作り上げて来た暮らし方〟を変えるということは、私たちの内なる自然に危機感を与えます」。

今までの生活様式と全くちがう電化器具をはじめとする合理的能率的生活の中で大人たちが何か不安定になっている根源を内なる自然の危機感によるとし、「このままでは子どもたちの内なる自然も壊されることはわかりきっています」と分析する。

ローレンツの人間自身の内部破壊とこの内なる自然が、よく響き合っているように思われる。

それには、子どもの自然ばなれをくい止める手だてが必要となる。中村氏自身も子どもたちと自然とふれあう実践を行っている。

園庭でマルムシを夢中になって探し、カキの雄芯を拾い集める都会の子どもたち。合宿保育で見た満天の星を小学五年生の作文に書いた子ども。身近な自然体験のできる場と時間を子どもたちに与える努力をしなければならない。

神戸の中学生の事件は、この内なる自然の破壊された結果ではなかったであろうか。

（東京家政大学）